

古代中世の日本の史書、文芸作品に見る 囲碁用語の多様化とその背景に関する考察

「古事記」に始まり宮廷文学で深化、能「碁」で大衆のものとなった碁
碁のことば

古 作 登

〈1〉古代日本では伝来当初から親しまれた 伝説の島の名前にも使われた「碁」の文字

本稿では古代中世の日本の史書や文芸作品で「囲碁」がどのように取り上げられてきたか、関連した単語、表現を追いながら囲碁をとりまく文化的背景と碁がどのように人々の生活、文化に浸透していったかを時代を追って考察し、室町時代の「能」で一つの完成形に至ったところまでを見ていく。

人間が文明を持ってからさまざまな遊戯が考えられてきたが、囲碁は他の遊戯とは違った特別な位置づけで考えられてきた。日本の史書に囲碁に関連した用語の中で最も古いのは712（和銅5）年に編纂されたとされる『古事記』の文中に登場する淤能碁呂島（おのごろしま）ではないだろうか。ここでは単に「碁」という文字だけでの登場である。古事記は神話時代の歴史書ではあるが、数多くの歌謡も取り上げられており文学的な価値も高く評価されている。古事記下巻で仁徳天皇が吉備の国に行幸する際に詠んだ歌の中に以下のようなものがある。

於是天皇 戀其黒日賣 欺太后曰「欲見淡道嶋而」 幸行之時 坐淡道嶋 遙望歌曰、
『淤志豆流夜（おしでるや） 那爾波能佐岐用（なにはのさきよ） 伊傳多知豆（いでたちて） 和賀久邇美禮婆（わがくにみれば） 阿波志摩（あはしま） 淤能碁呂志摩（おのごろしま） 阿遲摩佐能（あじまさの） 志麻母美由（しまもみゆ） 佐氣都志摩美由（さけつしまもみゆ）』
乃自其嶋傳而幸行吉備國

淤能碁呂島の所在は諸説あるが現在の淡路島の近くの小島という説が有力である。ここでは中国で当時、囲碁のことを表すために用いられた「碁」の文字でなく「碁」の漢字が用いられている。文字の起源からすると「碁」の正字は「棋」¹⁾でこれは「碁」とも表されるため意味はほぼ同じである。中国でも自然石を碁石に用いることはごく普通で、「碁」と「碁」の文字が時代によって並行して使われていたが、木を加工してできたいわゆる碁石＝碁が用いられたこともあったことがわかっている。日本では奈良時代のことを記述した『常陸国風土記』に「碁石浜」という地名が登場、碁石をそこで採取したようだ。地名が確定した時代がはっきりしないものも含めれば日本にはほかにも「碁石海岸」(現・岩手県気仙沼市)「碁石が浜」(現・静岡県伊豆市)「碁石浦」(現・長崎県西海市)などが存在する。こうしたことから、日本では碁の伝来当初から対局に自然石や加工した石を用いたと考えてよいだろう。万葉集には「碁檀越」²⁾(このだんをち)の妻が詠んだとされる「神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に」という和歌があり、ほかに「碁師」の歌二首も収められているが、碁のことを直接詠んだ歌は見当たらない。奈良時代はまだ碁に関する文芸的な表現は少なかったと思われる。

都が京都に移され、平安時代に入ることになると囲碁は知識階級の中に深く浸透していった。『日本三代実録』には804(延暦23)年の遣唐使、いわゆる「延暦の聘唐」に関する記述があり「碁師」「碁の上手なれば」の表現が見られる。藤原葛野麻呂を大使とし、僧の最澄、空海らも同行したがそこに親善使節として碁の名手、伴雄勝魚³⁾が随行したのは、すでに囲碁が自国文化を伝える外交手段の一つとして認められていたことを示すものであろう。この功績が認められてか812(弘化3)年、伴雄勝魚は従五位下・兵部少輔に進んでいる。

ここから半世紀あまりすぎ、平安時代中期になると文学の中にも囲碁が登場し、さまざまな表現が使用される。菅原道真(845年～903年)は幼少時から詩歌をはじめとした学問にすぐれ、宇多天皇(867年～931年)と醍醐天皇(885年～930年)に仕え要職を歴任した。いずれの天皇も碁をたしなんだというから道真との対局もあったに違いない。その道真が詠んだ和歌で囲碁を題材にしたものがあり、さまざまな表現でこの遊戯の興趣を伝えている。日本で「作品」として碁を文学的に表現とした最古期のものであろう。

「囲碁」

手談幽静処

用意興如何

下子聲偏小
成都勢幾多
偷閑猶氣味
送老不蹉跎
若得逢仙客
樵夫定爛柯

筆者の解釈では上記の漢詩の大意は以下のとおり。

「山奥のような幽静な場所で碁を打ち、意を用いる（気を配る）ことは実に興が深いことである。

石（子）を盤に下す、その音は小さくとも碁盤の升目に似た都を成す勢いのようだ。

閑を偷（ぬす）んで碁を打つことで、年老いてからも時を無駄にすることがない。

もし碁を打つ仙人に出逢ったら、斧の柄が朽ちるのも忘れたあの樵夫（きこり）のように時を忘れて夢中になってしまうだろう」

文中の「手談」は囲碁の別名。見知らぬ相手とでも一局碁を打つことによって対戦相手の人間を知ることができるという意味。「子」は碁石のことで現在でも置碁のハンディを二子、三子と表現するように子と石はほぼ同義である。最後の「爛柯」も「手談」同様に囲碁を表す表現として使われる。こちらの出典は南北朝時代、梁の仁昉が撰者の志快小説『述異記』と考えられている。囲碁の別称としては他にも「方円」、「烏鷺」が有名だ。「方円」は四角い盤上で丸い石を使って勝負を争うことから来たもの。「烏鷺」は鳥類のカラス（体色が黒）とサギ（体色が白）からきており、碁石の黒白を基にした表現。「烏鷺の争い」という表現もされる。

古代中国でも碁のことを詠んだ漢詩は多く存在する。唐代に「詩聖」と呼ばれた杜甫（710年～770年）は碁の愛好家だったらしく、碁にちなんだ詩を残している。杜甫の影響を道真も受けたのかもしれない。

道真と同じく醍醐天皇に仕えた僧、寛蓮（874年～没年不詳）は歴史上初めて「碁聖」と呼ばれたほどの碁の名手だった。出身は現在の佐賀県鹿島市、出家する前の名は橘良利といった。橘氏は藤原氏の流れをくむ有力貴族で、901年昌泰の変で大宰府（現・福岡県西部）に左

遷された道真とは対照的に寛蓮は醍醐天皇に重用され『今昔物語集』に金の枕を懸けて暮を打った逸話などが残っている。橘氏の祖先は九州北部で勢力を誇った豪族。鹿島市には奈良県の蘇我馬子の墓とされる石舞台古墳に形状がよく似て大きさが二回りほど小さい鬼塚古墳（写真1、2）が存在し、当時の権勢を思わせる。



写真1 6世紀ごろの物と考えられる鬼塚古墳入口。大和朝廷につながる有力者の墓とされる



写真2 鬼塚の内部。巨石で囲まれ、奈良県明日香村の石舞台古墳と様式が似ている

碁を専門とする職業が生まれたのは古代中国が最初であった。対局が主たる仕事となる現代の「棋士」が出現したのは南北朝時代（439年～589年）と考えられる。碁盤のサイズもこのころ17路から19路に改められ⁴⁾、前述のように日本に碁が伝えられた時期と推定できる。実力を表す「棋品制度」や棋士を管轄する官庁「囲棋州邑」が設けられ、専門棋士には禄が与えられた。南朝・梁の武帝（464～549）には『棋賦』という著作もあり、支配者の強力なバックアップを受けた最初の棋界隆盛時代といえるだろう。

中国が再び統一され唐の時代（618年～907年）に入ると「棋待詔」（きたいしょう）と呼ばれる皇帝の囲碁の相手をする官職が設けられ、棋士の地位は飛躍的に向上した。棋待詔になれる棋士は厳しい選抜を経た実力者で「国手」と呼ばれた。このような選抜試験を用いた官吏の昇進制度「科挙」は、平安時代の日本にも輸入され庶民から下級の官人になり貴族の位にまで上った例も存在したが、ほとんどは下級貴族であった。それは高官の子息に官位が世襲で与えられる仕組みが存在したからである。橘氏の流れを引く寛蓮が重用されたのは家柄、政治的才能以外に碁の技術が大きかったのではないだろうか。

平安時代後期から鎌倉時代になると、囲碁が本格的に文芸作品の中に登場するようになる。世界的に有名な紫式部の『源氏物語』には貴族や女官たちが碁を対局する場面がしばしば登場し、宮廷における代表的な遊戯として定着していたことがわかる。同じ平安時代の随筆『枕草子』には次のような段があり、専門用語がかなりの数登場する。

…人と物いふことを碁になして、近う語らひなどしつるをば、「手ゆるしてけり」「結びさしつ」などいひ、「男は手受けむ」などいふことを人はえしらず、（中略）あへなく近くなりぬるをば、「おしこぼちのほどぞ」などいふ。（枕草子161段より抜粋）

引用したのは清少納言が貴族の男性と囲碁用語を用いて会話した場面。双方にある程度の碁の素養がなければこうした「言葉の対局」は成り立たなかつただろうし、宮廷に出入りする地位の貴族らにとって囲碁の知識は必須だったとみることもできよう。

冒頭の「手ゆるしてけり」は相手に一目置かせる（先に石を打つ、着手することを許す）の意であろうか。「結びさしつ」は「駄目」をさす＝打つの意味。「駄目」という言葉自体も「打っても得にならない目」から囲碁発祥とされ、打っても一目の得にもならない着手、それが一般的になり無駄な行為を意味するようになった。この言葉は現代でも普通に使われている。「手受けむ」は警戒するの意とされる。さらに、あっけなく男女が親しくなることを「お

しこぼちのほどぞ」(終局して石を崩すこと)と説明している。石を崩せばこれまで盤上に合った白黒の石がいったんに混ざることから、男女の親密な交際を示すものであろうか。

和漢の教養に優れ、それを見込まれて一条天皇(980～1011)の時代中宮定子に女官として仕えた清少納言は男性と互角に碁が打てたようだ。現代でも囲碁用語を日常会話に普通使用的是棋士やアマ有段者と決まっている。出仕した時代が違いため紫式部と対局することはなかったと思われるが、二人とも当時最強レベルの女流の打ち手であったことは間違いない。平安時代後期には囲碁用語は知識階級の間では日常的に使われるようになっていたことが推測される。

〈2〉中世文芸におけるひとつの到達点 能「碁」における囲碁表現

平安時代から鎌倉時代を経て室町時代と時は流れ、500年の歳月は囲碁が広範な階層に遊戯として浸透するに十分な時間だった。平安時代以降日本で広まった将棋に負けず劣らず、囲碁も公家や僧侶だけでなく、武家や庶民の中でもたしなむものが増えていった。こうして室町時代には能(当時は猿楽と呼ばれた)の題材として碁が取り上げられるようになった。左阿弥が作者の能「碁」がそれである。理由は定かでないが長らく「廃曲」となっていた作品を明治時代に金剛流が「復曲」し、2001(平成13)年には観世流でも復曲公演、2015(平成27)年は大槻文蔵らにより演じられた。左阿弥についての詳しい情報は演者からも「定かでない」との情報を得たが、「阿弥」の名がついていることから能の第一人者である観阿弥や世阿弥の流れをくむ能楽師ではなかったかと思われる。本項では平成27年5月30日に公演された「碁」(ツレ・大槻裕一、シテ・大槻文蔵、ワキ・福王茂十郎)の台本から囲碁が主題になっている部分を順に見ていく。

「碁」は源氏物語の登場人物である空蝉と軒端の荻を中心に描かれているが、いずれも霊の姿として登場する。季節は秋、舞台最初に常陸の国から上洛を目指す僧(ワキ)が旅を続け、夕刻に京、三条京極の近くの白川に差し掛かったところ空蝉の化身の里女の尼(前シテ)が登場する。その夜、僧の夢に空蝉、軒端の荻が霊としてかつての姿で現れる。二人は源氏への思い出も恨みも残っているが、懺悔のために碁を打つという。能において霊が僧の前に現れるのは、現世に執着の残る魂を救ってもらうためである。

軒端の荻は源氏物語三帖「空蝉」、四帖「夕顔」、六帖「末摘花」に登場する主要人物。また

空蝉は三帖の主題になっており、光源氏が深く思いを寄せた女性である。三帖では軒端の萩と碁を打つ場面が描かれるほどの愛好者で、その境遇や振る舞いから作者の紫式部自身を意識して描かれたと推測する研究も存在する。能の「碁」では霊となった二人の対局の様子が以下のように描かれている。それぞれの台詞と筆者の解釈を順に取りあげていく。

御前にて。懺悔の姿を 現さば

つひにはあらじ生死の。海なれや数々の。浜の真砂の石立て争ふも心強からぬや。女の碁の勝負。現なの風情や

それ碁八定恵の一手を見せ。打つ音に阿吽の響きあり。されば目の前に生死の迷悟を現して八。即ち涅槃のかたちをみす

石の白黒八夜昼の色。聖目八九曜たり

目を三百六十に割ること八。これ一年の日の数なり

文中の「石立て」は布石のこと。「浜の真砂の」という表現は、海に無数にある砂をさしてあり、無限に広がる囲碁の盤上世界を表現したものだろう。本稿のはじめに取り上げた「碁石浜」など海と碁の関係は浅からぬものがある。舞台では源氏物語三帖「空蝉」で盤を挟んだ二人の霊となつての対局が始まる。「定恵の一手」の定恵とは飛鳥時代の学僧（643～666年）のことであろうか。囲碁の伝来は古代中国から仏教が伝来した時期とほぼ近いと考えられ、定恵も653年に遣唐使の一行として中国に渡っている。現代の研究でも囲碁の伝来年代ははっきりしていないが、この作品が成立した室町時代には囲碁の飛鳥時代伝来説が広まっていたと考えることもできるだろう。

その後の表現の「生死の迷悟を現して」や「涅槃のかたちをみす」は単なる遊戯としての「石の生き死に」を超えて、盤上を仏教の世界観に置き換え形容したものといえる。また石の白黒を夜昼（昼が白で夜が黒）にたとえ、盤上九カ所に印されている星＝聖目を九曜と表現したのも、白黒は古代中国に起こった陰陽五行思想、また九曜は古代インド占星術を漢訳化した『宿曜経』にある九つの惑星の意味で、やはり盤上を宇宙に見立てたものと思われる。古代中国、漢代の囲碁盤は十七路盤（17×17）であったことがわかっているが、日本に伝わってきたころの碁盤の目は十九路盤（19×19）で、その盤上の交点の総数が361あることから「目を三百六十」と表現し、当時日本で使われていた暦、一年約365日の日数にも例えている。日本の暦は囲碁が伝来したと思われる6世紀ごろから江戸時代まで中国で作られたものを取り入れて

おり、この作品の頃は宣明暦、地方によってはそれを基に多少の手を加えた暦が使用されていた。推測ではあるが、6世紀に朝鮮半島の百済を経由してさまざまな文化が伝わった中国南北朝時代、南朝宋の元嘉歴と同じルートで碁がもたらされた可能性は少なくない。ただし暦の伝来に関しては『日本書紀』にも記されている（554年）が、そこに碁の伝来に関する記載はない。

碁は敵手に会ふて。行をかくさず。僅かに両三目に。じうらいじうくの道あり。ある時八。四面を囲まれ。いせいを求めある時八。敵を攻めいと攻められ。恋しき時八うば玉の。夜の衣を返しても。寝ばまやすらん波枕。浮木の亀の自から。一目劫なりと立てて如何あるべき

敵手は無論対戦相手のこと。「僅かに両三目」とは互いにわずか三手（三目）ほど打っただけでも、「じうく」は「十九×十九」の盤面に引かれた線、無限の道が広がっていると例えたのであろう。また「四面を囲まれ」は囲碁において周囲を囲まれた石は眼がふたつないと生きることができないため、危機に面している様子を表す。いせいは「威勢」で囲まれても石には勢いがあり、相手の石を攻めたり攻められたりした対局の様子を表現した。「寝ばま」はアゲハマをあらかじめ座布団の下などに隠しておいて、終局後の地計算で不正を行うことである。アゲハマを飲み込んで勝敗を覆したのは『吉備真備入唐絵巻』⁵⁾の囲碁の場面にも登場し、この作品の基となった『江談抄』（12世紀初期の編纂とされる）にあるエピソードが有名だ。このことから平安時代から日本の囲碁が現在のルールに近い、終局後にアゲハマを相手の地に埋めて計算するルールで対局していたことがわかる。「はま」は「濱」とも記述するし、碁石自体が海の自然石を用いることも多かったのでその後の「波枕」にかけているのだろう。「一目劫なりと立てて」は碁のルールである「劫立て」に関連付けている。

されば生死の

二つの川を渡り手の中に白道を現し。黒石八よしなや今打つ五障三従の。女の身に八逃れえぬ。劫深き石立て心していざや打たうよ。

源氏の巻や繪合の。勝負八知らねども。名を聞くも竹河の。節ある石を桐壺

帚木の巻の碁の勝負。うちしめたる雨の夜に手品をいざや定めん

夕顔の宿に碁を打てば。黄昏時もはや過ぎぬ。空目せし半葩を。おろすや中手なるら

ん。

絶ゆまじき。筋を尋ねし玉鬘。征にいざやかけふよ。

冒頭の「生死」は無論碁の勝負の本質「石の生き死に」にかけている。二つの川と白道は「二河白道」を指しているのだろう。浄土教における信心を示すたとえで、右側にある欲を現す水の川と左側の憎しみを表す火の川の間にある白い道を通して阿弥陀如来の待つ彼岸、極楽浄土に渡るというもの。

盤上の勝負を超え、碁が生死を超えた宗教的な意味合いを持つ遊戯であることを示しているともいえよう。なお浄土宗には「囲碁双六は専修に背かず」すなわち囲碁や双六を行うことは信仰の妨げにならないとの言葉も残っている。もっとも碁は757年に施行された養老律令の中の僧尼令⁶⁾で以下のように規定されている。

第九 作学音楽

凡僧尼作音楽。及博戯者。百日苦使。碁琴不在制限。

僧や尼僧が音楽をたしなみ、博打をした場合は百日間の苦役を科すが、碁や琴に関しては制限しないと記されている。多くの寺院では僧侶が碁を打つことを禁じておらず、賭博性の強い遊戯とは一線を画していた。

直後の「五障三従」も仏教用語で仏教以前にインドで広まっていたヒンズー教の影響を受けて作られたとされる言葉である。「五障」は女性が持つとされた5つの障害を指し、端的には女性はそうした障害があるため仏陀などになれないというもの。なお仏陀の言葉では男女の区別なく仏になれるとしている。「三従」(三従)は女性に推奨された「幼きは父母に従い」「少則は夫に従い」「老則は子に従う」という生き方。いずれも女の人が成仏するのは容易でないと考えられた当時の思想である。ここでは二人が現世、そして霊となった今でもこうして相まみえる業の深さを表した表現であろう。それを受け「劫深き」は「業深き」にかけている。囲碁の対局における「劫」は「劫立て」をしないで石を取り合うと、永遠に同形が反復して終わることがなく、すぐ取り返すことは禁じ手になっている。霊になってまでも続く長年の因縁を盤上の勝負でつけるべく「いざや打たうよ」と呼びかけ、ついに二人の碁の対局が始まる。

「竹河」の巻(四十四帖)は『源氏物語絵巻』の中で宮廷に暮らす美しい姉妹が囲碁の対局をする場面が描かれていることで有名だ。「節ある石」は囲碁の用語として相手の「石に節を

つける」すなわち切断の余地を作っておくというように考えられる。それが直後の「桐壺」と一帖の巻名、また登場人物としての桐壺を「石を切る」(相手の石の連絡を切断する基本的な技術)の掛詞に使っている。その後も物語の巻名をちりばめ、碁の対局の雰囲気や巧みに演出している。「蓐」は建具の一種で格子状になっているため碁盤の狭い範囲を表しているのだろう。その狭い範囲に放つ「中手」は相手の一団の急所に石を打って死命を制すること。「筋」は「筋の良い手」のように使われ、模範となるべき石運び、打ち方のことを指す。また「征」(シチョウ)は石を当たりの連続で階段状に追いかけて取ること。いずれも現代でも碁碁用語として使われる言葉で、これらが物語の中で用いられているということは、観客も専門用語がある程度理解できるほど碁碁が一般的に広まっていたことを示すものだろう。

石は白。名は髭黒の大將の。真木柱名をぞ立つ。下煙胸くゆる。

真木柱名をぞ立つ。下煙胸くゆる。火取りのハイをうちかけられ。ねたなや恋の二道。

梅が枝紅梅巻々の。匂ふも薫も分きかぬる。身を宇治山や雲雪の。茂木の下根春寒み。

萌え出でかぬる早蕨の手を見せぬことぞ悲しき

この部分の台詞は碁石の白と黒を軸に源氏物語の巻名である「真木柱」(三十一帖)「紅梅」(四十三帖)や物語の主要人物、匂宮にかけた「匂ふ」や薫、物語末尾にあたる「宇治十帖」から宇治山、さらに「早蕨」(四十八帖)と次々と登場させ、現代的な解釈では言葉のリズムの良さも用いて舞台を盛り上げていくイメージであろうか。恋の二道も先の「二河白道」と同じで浄土教の影響が色濃く感じられる台詞である。

急いで碁を打たうよ。急いで碁を打たうよ。まづ一手。二手。三手。いざや目算せん。

四手五手六目ふしとか。七打八打。九打十市の里の碁の勝負。碁にそへて打たうよ。碁

は千声万声碁は百度千度万手。空蟬八負けたり。軒端の萩の秋来ぬと。かつ穂に出る芦

分舟。押すこそ恨みなりけれ押すこそ恨みなりけれ

押さでは叶ふまじきこの碁

(以下略)

能舞台ではこのあたり、軒端の萩と空蟬が碁を打ちながら舞うハイライト場面となる。「目算」は一局の碁において形勢を判断するため地の多少を計算する作業。現代でもごく普通に使

われているが平安時代の文献にこの用語が見当たらないことから、鎌倉時代から室町時代の間
に用いられるようになったのであろう。碁は当時使われていた洗濯用具で「とんとん」と衣類
を棒や槌で叩きながらしわを伸ばしたりした。囲碁で石を盤上に打つのと道具で衣類を打つに
かけており、リズムの良い石音を想像させる。また「押す」は碁で相手の石に沿って着手する
ことで、力強い手であることが多い。

二人の対局は決着し、空蝉は敗れる。軒端の荻は現世では、光源氏の愛情を空蝉より深く受
けることはかなわなかったが、霊となってからの対局で勝つことで、多少なりとも救いを得る
ことができたのではないだろうか。敗れた空蝉は敗戦を悔やむが現世のことを懐かしく振り返
り、碁を打ったことと僧の回向によって軒端の荻とともに成仏し、物語は収束する。

古代日本にアジアの西域から伝わり、民衆が見ることも多く全国に広がった散楽の流れを受
け継いだ猿楽、また農耕行事から発展した田楽が現代の能の基になった。猿楽や田楽の役者集
団は「座」と呼ばれ寺社に所属し、法会や祭礼に集まった人々に芸を披露し喜ばれた。『源氏
物語』などの宮廷文学は写本で残っているものはわずか数十部、当時は宮廷の限られた知識階
級だけに読まれ、庶民は物語の存在すら知らなかったであろう。対照的に能はもともとが大衆
芸能である。本稿では台詞の中の囲碁用語や表現がどのような意味、背景を持っているのかを
解釈したが、能の中にこうした碁を主題とした作品が生まれたことは、貴族や武士、僧侶など
の支配層以外に、単なる盤上遊戯ではない碁の持つ深遠さが理解されるようになったことを示
すものであろう。

この研究は、平成27～28年度大阪商業大学アミューズメント産業研究所研究費を受けて行っ
たものである。

〔注〕

- 1) 白川静『字統』平凡社 2013年による解釈
- 2) 碁の好きな旦那(檀越)という意味
- 3) 当時の官位は正六位上と格は低かった
- 4) 「囲碁19路盤の起源」谷岡一郎に詳しく、香川忠夫による中国囲碁史の先行研究の影響も大きい
- 5) 唐の名人と対局することになった吉備真備は命をとしての勝負にアゲハマを飲み込むことで辛くも勝利す
る。飲み込んだアゲハマを探そうと役人が真備を調べる場面も描かれている
- 6) 僧尼に関する行政と刑罰の規定が記された条文

【参考文献】

- 小松成美・編『日本絵巻大成 1 源氏物語絵巻 寝覚物語絵巻』中央公論社 1977年
小松成美・編『日本絵巻大成 3 吉備大臣入唐絵巻』中央公論社 1977年
香川忠夫『中国囲碁史料集成』 2004年
増田忠彦『囲碁 語園』（上・下）大阪商業大学アミューズメント産業研究所叢書 2012年
増川宏一『日本遊戯史』平凡社 2012年
中村元・早島鏡正・紀野一義『浄土三部経』（上）岩波文庫 2013年

中村元・早島鏡正・紀野一義『浄土三部経』（下）岩波文庫 2014年
復曲能『碁』上演詞章 大槻能楽堂 2015年
山口佳典・神野志隆光『新編日本古典文学全集 1 古事記』小学館 2015年
安田登『能』新潮社 2017年